二〇二〇年九月五日

見回りの神官腰に蚊遣り香　よう子
新涼の朝一番の熱きお茶　はく子
神鏡の中まで灯り万燈会　うつぎ
蟷螂の振り向きざまの殺気かな　素秀
夏バテやイケメン医師に脈とられ　よし子

二〇二〇年八月二九日

短冊に五歳の願ひ星祭　よし子
開くたびに熱風どつと自動ドア　せいじ
立話してゐるだけで汗滂沱　菜々
木漏れ日に現れては消ゆる蜘蛛の糸　うつぎ
日盛りや自動運転モノレール　更紗

二〇二〇年八月二二日

梅花藻の花屑掬ふ茶屋主　よう子
自転車の吾と併走す赤とんぼ　せいじ
朝窓の枝移りする鳥涼し　そうけい
朝の間に用事を済ます残暑かな　小袖
稗一本早稲の穂波を抜きん出て　うつぎ

二〇二〇年八月一五日

廃校の低き蛇口や日輪草　かかし
長兄の一人生家に生身魂　はく子
瓦斯燈の灯る街角夜の秋　わかば
竹落葉褥に力石二つ　うつぎ
ローマ字の表札の家秋簾　うつぎ

二〇二〇年八月八日

雨乞ひの宮に数多の蝉の穴　なつき
栞して漱石横に大昼寝　うつぎ
駅ホーム茶畑見えて宇治涼し　はく子
雨晴れてより梢降る蝉時雨　ぽんこ
妙見山の水は豊かや青田波　よし子

毎週句会秀句・みのる選・二〇二〇年九月八日